The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ことばのすきまの多文化共生 : 枚方市「日本語・多文化共生教室よみかき」／保健センター
Author(s)	高原, 耕平
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 251-260
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60719
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ことばのすきまの多文化共生

枚方市「日本語・多文化共生教室よみかき」／保健センター

高原 耕平
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程

写真 1.「よみかき」授業の様子

名称：日本語・多文化共生教室よみかき
場所：大阪府枚方市（市内 6 箇所）
開始年：1982 年
活動内容：地域住民ボランティアによる、日本語のよみかきを学びたいひと（日本人、外国人を問わず）のための無料講座、地域住民と外国人住民との交流活動。

写真 2.　保健センター離乳食講座の様子

名称：枚方市保健センター
場所：大阪府枚方市禁野本町
開設年：1987 年
活動内容：枚方市の地域保健活動を一手に引き受ける。予防接種、母子保健、成人保健、介護予防。

1. 現場のことば、ことばの現場

現場とは、ことばとことばでないものがお互いのために現れ合う場所である、という定義もできるかもしれない。もしそうなら、言語や文化の違いに突き当たり戸惑いながら、声やしぐさの交わり方をひとつずつ確かめてゆく作業が行われている空間、つまり異なる故郷から来たひとびとと共に住み着こうとする

街全体が、小さな現場の集合体と呼べるだろう。

大阪府枚方市はそのような街のひとつかもしれない。未来共生プログラムでは、2014年度と2015年度に、幼い子どもを持つ外国人住民との地域共生を目指した活動を同市で行った[1]。この活動を支えてくれたのが、同市の保健センターと「日本語・多文化共生教室よみかき」だった。活動ではまず「よみかき」で外国人住民にヒアリングを行ったあと、保健センターで外国人住民が参加しやすい離乳食講座を実施した。

本稿ではこの2つの現場を改めて取り上げることにした。これらの現場がいずれも、ことばと生活が深く結びつく場面にかかわっているのではないかと感じたからだ。そうした場面でおのおのの現場が探りとっている多文化共生の諸課題を聞いてみたい、という思いがある。まず「よみかき」と保健センターの取り組みを順に紹介したうえで、生活の日本語という課題をかんがえてゆく。

2. 共生の取り組み

2.1「よみかき」の現場から――「日本語・多文化共生教室よみかき」

待ち合わせより少し早く着いてしまった。その「よみかき教室」の部屋は生涯学習市民センターの3階にあって、四角く並べた長机に10人ほどが座ると、もう一杯になるくらいの小ささ。部屋の入口で挨拶と自己紹介をすると、ええ？　きょう来るの？　別の日やと思ってたー！　とボランティアの女性が言う。まぁええわ、どうぞ入って入って、と促される。大歓迎でも拒絶でもなく、いつもどおりのことのように初めての人間を受け入れてくれるのがありがたいなとおもう。

外国人学習者と日本語ボランティアがひとりずつペアになり、ひとつの机に隣り合って座っている。いつのまにか「授業」が始まっている。なんだか、ゆるい。テキストを見せてもらう。漢字の学習のページだった。「日」と「月」が合体して「明」になり、「明」と「日」が連なると「明日」になる、といった説明がテキストに書かれている。「それでこうなると、『あす』ね」「あす？　あした？」「ああ、『あした』とも言うねぇ……」「違う？」「同じやな」「あ、わかりました」。ほかのテーブルでもわちゃわちゃと授業が進むけれど、教室全体の雰囲気はゆったりとしている。わたしが母からことばを学んだときも、このくらいのゆるやかさだったのではないか。

「明日」を教えていた日本語ボランティアの男性が、別のテーブルで教えていたボランティアに「保育所ここらへんどうなっとん？」と突然聞いた。どこそこにあるよー、という返事。市内の待機児童の事情に話が広がった。授業はそのあいだ止まっている。学習者の女性はいまお腹に赤ちゃんがいて、産むときはベトナムに里帰りするけれど、また枚方に戻ってくる予定だということだった。そのあと子どもを育てながら働くなら保育所はどうするのか、という話になっていたらしい。日本語を学びながら地域生活相談も進むという具合になっている。その2つが切り離されていないのが、この「日本語・多文化共生教室よみかき」の特徴である。

もうひとつの特徴は、教室が、故国を同じくするひと／しないひとびとが互いに接点を得るための場でもあるということである。この教室で知り合って友人となる学習者も多いのだと聞いた。ひとりの学習者が、「また来ますか？」と日本語で聞いてくれた。「あ、はい」と答えた。答えてしまったので、翌週、「よみかき」主催の小さな料理教室に来た。みんなでスーパーに行く。食材の使い方をボランティアの女性が学習者に説明している。お好み焼きを焼いた。関西弁の達者なフランス人のおばちゃんに「ベトナム人？」と問われた。いえ、わたしは日本から来ました。

2.2 地域につなぐボランティアと枚方テーゼの伝統

枚方市の「日本語・多文化共生教室よみかき」は市内の生涯学習市民センターなど6ヶ所で主に週2回ずつ開かれている。開室時間は教室によって夜間と午前に分けられている。わたしが訪問したのは夜間の部で、学習者は働いている人が多い。無料で受講できる。

枚方市は大阪府北部に位置する人口約41万人のベッドタウンである。京都と奈良に隣接し、なだらかな山々に囲まれたスープ皿の底のような土地に、古い宿場町と新興開発された宅地が重なりあっている。市の外国人住民は約4000名、総人口に対する比率は日本全体の平均（1.4%）を越えない[2]。この点では、ブラジル人移民労働者が集住するといったケースには当てはまらない、い

わば「ふつう」の自治体である。けれどもその普通の街のあちこちで、どことなく不思議で、ゆるやかで明るい、ことばの共生の現場が30年以上保たれてきた。この開かれた場所を支え続けてきたものは何なのだろうか。そこにはどのような知恵が織り込まれているのだろうか。

ひとつには、日本語ボランティアの果たす役割が大きい。各教室の運営はボランティアがみずから行う。彼らは料理教室やハイキングなどの小さな催しも定期的に企画する。市の行政職員は全体的な調整に携わるけれど、市民の自主的な参加運営が基本的な前提として尊重されている。

日本語ボランティアの主力は定年退職した中高年の地域住民で、10年以上この「教室」で教えているベテランもいる。しかし効率よくカリキュラムを教え込むためのスキルに特化してはいない。わからないことがあれば、学習者といっしょにスマートフォンで検索し、ウェブ上の辞書サイトも使ってみる。機器の使い方を高齢のボランティアに教えるのは若い学習者である。「地域型日本語教育」(庵 2016)の特徴である、ボランティアと学習者の相互の学び合いがうまくかたちづくられているように感じられる。

日本語ボランティアのほとんどは、もともと地域に長く住んでいるひとびとである。この街に住み始めた外国人学習者にとって、教室で知り合ったボランティアは地域での生活を気にかけてくれる存在にもなりうる。

教室を支えてきたもうひとつの背景として、枚方市の独特な社会教育の伝統がある。枚方市の「日本語よみかき教室」は1982年に始まった。当時、市内で最初の公民館の建設が計画され、市民がその使い方や運営方法を自分たちで考え始めていた。こうした市民の自主性の源流には、市民が自ら社会教育を実践展開してゆく、「枚方テーゼ」の経験があった(岡田 2008)。

公民館の用途が話し合われていた同じころ、一人の女性が枚方市役所を訪れ、じぶんに読み書きを教えて欲しいと要望した。彼女の求めに応じるかたちで、完成したばかりの楠葉公民館で識字教室が始まった(元木・内山 1992)。その後、市内公民館の拡充に伴い、「よみかき教室」も順次開設された[3]。以来、30年以上の積み重ねがあることになる。日本語の読み書きを学べなかった日本人住民のために始まった教室だが、いわゆるニューカマーと呼ばれる外国人住民も広く受け入れるようになった。

以上のように、「枚方テーゼ」を源流とした市民の自律的な社会教育の経験と伝統、また行政によるハードウェアの整備がうまく噛み合うことでよみかき教室が始まり、その積み重ねのうえで、近年は外国人住民を地域に迎え入れる場所として機能してきたと言える。

2.3「寝がえり」の現場から——枚方市保健センター

つぎに、あるケアの場面から多文化共生におけることばの課題を探ってみたい。

枚方市保健センターは同市の保健行政の拠点である。センターの主要事業は予防接種、母子保健、成人保健、介護予防の4つに大別される。今回は母子保健の現場の取り組みと課題を紹介してゆきたい。

保健センターには保健師、看護師、保育士、管理栄養士といった専門職スタッフが非常勤を含めると100名近く勤務する[4]。「よみかき」がボランティアによって開かれてきた場所だとすれば、センターは文字通りのプロが支える職場である。スタッフはほとんどが女性である。2階のオフィスは動きにあふれている。つねに誰かが椅子から立ち上がり、だれかと相談し、席に戻り、また立ち上がって町に出撃してゆく。航空母艦の甲板を思わせる。

4ヶ月児健診は3階で始まっていて、たくさんのお母さんが受付に並んでいる。待合スペースの床に大きな四角いマットが敷かれていることに目が引きつけられる。お母さんがだっこひもを解いて、赤ちゃんをマットにごろりんと寝かせた。手と足がにょきっと突き出ては、やわらかく弧を描いてちぢまる。首と眼がお母さんを探している。年上のきょうだいの顔がにゅっと伸びてきてのぞきこむ。

健診は保健師との問診から始まる。お母さんと保健師さんが隣り合って座る。「よみかき」の座り方と同じだけれど、テーブルの上にはテキストではなく赤ちゃんが寝転がっている。たまに、お父さんや、お母さんのお母さんもいる。

保健師さんは赤ちゃんの日頃の様子や心配事をお母さんに聞いてゆく。乳児の発育が順調に進んでいるか、病気や障害がないかを確かめるのが健診の最大の役割である。ただ、すぐに赤ちゃんを診はじめるのではない。保健師さんはまずお母さんの話を聴ききってから、ようやく赤ちゃんに問診のフォーカスを

移す。

保健師さんは問診のあいだ、しきりに赤ちゃんにふれている。赤ちゃんは何もあらがわず保健師さんの手のひらにじぶんの肌を与えている。さする、なでる、ちょっとくすぐってみる。お母さんに赤ちゃんを抱かせてから、また足にぽんぽんとふれる。なぜでしょうかと別の保健師さんに聞いてみると、そんなに触っていますかと意外そうな顔をされた。

4ヶ月の赤ちゃんは、寝がえりができそうで、まだできない。保健師さんの手が伸びてきて、うつ伏せにさせる。赤ちゃんの肘を肩の下に入れさせると、首をつっぱって顔を上げる。眼がくりんと広がって前を見る。重力に抗って生まれた視界にお母さんの顔が現れると、3人とも笑顔になる。少し離れて観ていたこちらもつられる。

別のテーブルでは外国人のお母さんが問診を受けている。保健師さんの質問がほとんど通じていないようだった。何かを語りかけようとして、何かを聞こうとするけれど、そのたびにお互いのまばたきが下に落ち込んでしまう。いっしょについてきた、お母さんのお母さんがときおり通訳に入る。問診が終わったあと、担当していた保健師さんが頬に手を当ててじっと考え込みながら用紙に記入する文面を考え込んでいた。

2.4 保健師はなにを読み取ろうとしているのか

保健センターの健診は市内の乳幼児全員を対象としており、外国人住民に向けた特別の取り組みではない。けれども、健診やアウトリーチ活動（保健師による訪問）で出会う母子のなかには日本語を母語としない住民がかならず含まれる。そうした場面で保健師さんたちはどのような課題に出会ってきたのだろうか。20年のキャリアを持つ保健師さんと栄養士さんにお話を伺った。

まずシンプルに、日本語が通じないという問題がある。ただしほとんどの場合、健診などに来る外国人住民は通訳役の知り合いや日本人配偶者をみずから同伴する。また、英語による会話や漢字での筆談が可能な場合も多いという。

しかし保健師さんたちが気にかかっているのは、お互いの母語が異なる場合、お母さんの抱えている不安や子どもの状況の「微妙なニュアンス」がわからないことである。表面的な意思疎通よりもう少し深い部分を丁寧にうけとめきることが難しいということである。

言語の違いによるギャップを迂回して微妙なニュアンスを探るためにはどうすればよいのだろうか。過去の経験からさまざまな可能性を勘案して母子の状況を推測すること、保健師さん自身のことばを借りれば「引き出しを増やしておくこと」が大切であるという。生じている問題を保健師と子どもの親の双方がことばにできないようなとき、保健師は過去の経験のレパートリーを総動員しながら問題の中身をふちどってゆく。

再び保健師さん自身の表現を用いると、そうした経験の蓄積が保健師の「力量」に直結する。ここでの力量とは、自身の経験を現在の状況に適用し、問題解決のため既存制度や技能を活用する能力である。しかし、近年は業務の外部委託が進み、スタッフが経験を深める機会や、問題の所在そのものに触れる場面が減っている。外国人住民に関することに限らず、地域住民の問題の掘り起こしができなくなることを危惧しているという。

次に、文化的な差異という問題がある。離乳食の時期や、「しつけ」の感覚は万国共通ではない。こどもを叩いてしつけることを当然だとする「お国柄」の家庭の場合、日本人の保健師が持つ文化意識からは違和感を覚えることもある。しかしこのような状況では日本人保健師の側が文化的な感覚のズレを一挙に飛び越えて行動してもうまくいかないことが多いという。ギャップを挟んだ微妙な押し引きが求められることになる。

他方、保健師にとって、子どもの体重の増え方や健康面での問題は、「文化やから」で済ませることのできない、ほっておけない「一線」でもある。健診やアウトリーチ活動が住民の生身の生活に入り込んでゆくほど、文化的相対性に対する自覚が緊張をはらんでくる。

3. 共生の諸課題——「生活の日本語」という課題

本稿では、枚方市の「よみかき教室」と保健センターという2つの現場の実践を取り上げた。これらの小さな取り組みを取り上げたのは、日常生活の中でことばがクローズアップされるこうした場面で「多文化共生」の課題を探ることができるかもしれないと考えたからだ。2つの現場が取りくんでいるものは何な

のだろうか。

「よみかき教室」が目指すものは、〈生活の日本語〉を外国人住民と共に模索することである。先ほどスケッチしたように、「よみかき」の教室の様子は民間の語学学校と大きく違う。ことばの学びが、つねに学習者の地域での生活・生存・相互理解をめざして進んでゆく。ボランティアにとっても学習者にとっても、日本語を教え学ぶことと、食材の買い方を説明することはつねに同じ視線のなかで行われている。

日本語学習者のニーズはさまざまである。職を得るために学ぶひともいれば、よりよい生活基盤を築くためにことばの理解を深めようとするひともいる。日本人の配偶者や家族がいる場合、同じ国から来た友人や親族が近辺にいる場合、いない場合、それぞれに直面する課題が異なる。日本語ボランティアたちはそうした個別の状況を受け止めながら、それぞれの学習者にとっていま最も必要なことばの学びをガイドしてゆく。

別の表現をすれば、よみかき教室の現場で実践されているのは、単なる日本語の文字・文法・語彙・発音の訓練ではない。むしろ、外国人住民を受け入れ、地域につなぐための場所として教室が開かれており、日本語学習はその場所の基軸のひとつとして用いられているようにも思われる。だからこそ、授業の合間に保育所事情の話が始まるといったこともごく自然に生じる。日本語ボランティア自身の表現を借りると、〈生活の日本語〉が目指されている。

保健センターの保健師さんたちが健診やアウトリーチでつかもうと苦慮しているのも、この〈生活の日本語〉の領域なのではないか。授乳と「お乳」、睡眠と「ねんね」、排泄と「うんち」はそれぞれ同じではない。「夜泣き」「げっぷ」など体調や表情を表すための語彙や、独特の擬態語・擬音語もそれぞれの意味を持っていて、他に置き換えることができない。このように、育児をめぐることばはしばしば母語のひだの奥にさまざまな意味合いを隠している。その微妙な感覚こそ保健師さんが親の表情や子どもの肌から聞き取ろうとすることであり、翻訳・通訳の過程で真っ先に失われやすいものでもある。

「よみかき教室」のひとびとが〈生活の日本語〉を探っているとき、また保健師が健診で母子の表情を読み取ろうとしているとき、そこで何が目指されているのだろうか。〈生活の日本語〉は、単に地域生活の中で頻用される語彙や表現だけを意味するのではないように思える。むしろ、地域での共存を目指すなかで結果として探り当てられていることばである。その模索は、（やや表面的な例だが）スーパーでハラル食品がどう表示されているか、保育所に外国人住民の子どもがスムーズに入所できるのかといったように、地域の在り方や自身の価値観に対する反省的な視線を日本語話者の側にもたらす。

〈生活の日本語〉は地域生活に還元されてゆくけれど、かならずしも地域のことばではない。生活の中から生まれるけれど、同時に反省という仕方で生活から離れてゆく。ふたつの現場で起きているのは、そうした性質のことばをくりかえし試してゆくことなのかもしれない。

4. ことばのすきまから

ふたつの現場で見出されたのは、狭義の「言語能力（日本語能力）」や「意思疎通」には還元しきれない部分で、隣人との間柄を作り続けるはたらきが生きてくるのではないか、ということである。「よみかき教室」では、検定試験で測定される能力とは別次元の、生活のさまざまな現実に共存の志向性を向けていた。保健センターの保健師さんたちが聞き取ろうとするのも、乳児のリアルな状況や母親の不安といった「微妙なニュアンス」であった。

もちろん、狭義の言語能力の習得や通訳制度の拡充は、そうしたニュアンスの把握や、地域生活での居場所づくりをダイレクトに助けるものである。しかしそれだけではなく、わたしたちがふだん「言語」というフレーズから思い浮かべるものからはこぼれ落ちてしまうもの、つまりことばのすきまのような次元に共生の小さなヒントが蒔かれているように思われる。ことばでないものからことばが立ち上がってくるのを助けること、古い隣人が新しい隣人のために自分のことばをリセットしてことばでないものへ自らをオープンにしてゆくこと、かれらが繰り返し試しているのはこの積み重ねであり、市外から訪れた異邦人にはその積み重ねがひどく新鮮なものに感じられた。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、林文子氏、竹下勝啓氏（「よみかき」日本語ボランティア／コーディネーター）、

学習者のみなさま、進藤和也氏（枚方市教育委員会）、沖登美子氏（枚方市保健センター・保健師）、谷淵郁氏（同・管理栄養士）にご協力をいただきました。

注

1　三好裕貴・波田野希美・崔美善・崔鍾煥「インターナショナルシティ HIRAKATA ―子どものいる外国人家族と保健センターをつなぐプロジェクト」（2015年、プロジェクト・ラーニング）http://www.respect.osaka-u.ac.jp/activities/classes/international_city_hirakata0901/

2　平成27年国勢調査速報値。http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon1/pdf/gaiyou1.pdf

3　1982年度楠葉公民館（現・楠葉生涯学習市民センター）、1983年度サンプラザ市民センター（現・サンプラザ生涯学習市民センター）、1986年度蹉跎公民館（現・蹉跎生涯学習市民センター）、1988年度牧野公民館（現・牧野生涯学習市民センター）、1990年度津田公民館（現・津田生涯学習市民センター）、1997年度菅原公民館（現・菅原生涯学習市民センター）。

4　枚方市保健センター『保健年報 平成25年統計』。

参照文献

庵功雄
2016 『やさしい日本語――多文化共生社会へ』岩波新書。

岡田真由美
2008 「住民自治を培う人材のネットワーク形成について――枚方テーゼの歴史的検討」『龍谷大学大学院法学研究』10: 71-105。

瀬川芳則ほか
2013 『枚方の歴史』松籟社。

元木健・内山一雄
1992 『識字運動とは〔改訂版〕』解放出版社。